

メッセージの送り手

Hitoe HIGUCHI

カリタス短大でフランス語を学び、2年後次のステージに移った卒業生たちはそれぞれの場で元気ががんばっているだろうか。1983年に仏語科がスタートし、1995年には仏語・仏語圏文化専攻に変わり、時が流れて1期生は不惑の年齢になった。

海外に行った折に、現地にとけこんでたくましく生活している人や、地道に勉強を続けていたり、生き生きと働いている卒業生に会うのはうれしい機会である。今では彼女たちから教わることも多い。学生時代とはがらりと違った姿に接することができるのも楽しい。

今年も11月の推薦入試を皮切りに、来年4月に入学してくる人たちが少しずつ集まってきた。時代は変わり、どうしてフランス語を？という質問に対する答えも十人十色で興味深い。最初は小さなきっかけがフランス語への入り口になり、在籍する間にその関心をより深め、そこからまた別の方向へ進んでいく例も見られる。少人数の割に北海道、沖縄からカリタスをめざしてやってくる学生がいるし、最近では動機付けのしっかりした社会人学生も増えた。たった2年間ではあるが、個性的な人たちが互いに切磋琢磨し合えるよい機会だと思う。フランス語を共通項とする人たちすべて、卒業生、在學生、そしてこれから入学してくる未来の学生に対して、教員としての私はメッセージを送る係りだと思っている。

この10年、私が関心をもって取り組んできたフランスの19世紀の女性作家ジョルジュ・サンドは、1904年に生まれたので、昨年生誕200周年を迎えた。これを期に日本でもサンド研究の熱が高まり、学会などでさまざまなイベントが催され、私もそのいくつかに参加し、この稀有な作家を見直すよい機会となった。私自身もこれまでに書いたものを『ジョルジュ・サンドへの旅』と題した1冊の本にまとめた。これは今までの歩みに一つの区切りをつける試みだったが、一連の仕事を通して感じたことは、一つのことに関心を持ち、それに取り組んでいくと、また次の課題にぶつかり、どんどん楽しい迷路に入り込んでいくということである。

思えば、18才のときにフランス語を始めたことがきっかけとなり、そこで生まれた小さな流れが時とともに次第に大きくなってきた、という気がする。

これからも私は細々とサンドの作品を読み、新しい発見をし、それを周りの人たちに伝えていこう。メディシンボールという遊びがあるが、フランス語でつながっている人たちに、次々とメッセージボールを送る役割を果たしていきたいと思っている。

(樋口仁枝・本学教授)

カリタス女子短期大学卒業生の活躍

寺田 朋子

カリタス女子短期大学 仏語・仏語圏文化専攻 1995年度卒

1996年にカリタス女子短期大学を卒業後、青山学院に編入、一年間のリヨン語学留学を経て、卒業後再渡仏、1999年から5年間、ペニンゲン E.S.A.G Penninghen Ecole Supérieure d'Art Graphique et d'Architecture intérieure にてグラフィックアートを学びました。2004年6月にペニンゲンのディプロム、続いて2005年2月に労働ビザを取得、現在はフリーランスとしてグラフィックデザイナー、イラストレーターとしてパリで活動しています。

カリタス短大の恵まれた環境、あざみ野の緑豊かな美しい校舎の中で学んだことは、今の私にはなくてはならないステップであったと実感しています。少人数のクラスに、熱意あふれる教授陣、語学だけに留まらず、様々な方面から文学、文化を追求するカリタスでの講義は实际的・先進的なものであり、まず第一に、渡仏を決意する際の大きな後押しとなりました。さらに、フランス文学の精神が背景となっている社会で、フランス人と肩を並べて仕事をして行く上で、その知識、理解を深められたことは大変役に立ちました。例えば、ポスター制作一つをとっても、そのテーマに関する理解があるか、対象となる社会通念に適應したアイデアが得られるかはとても重要なことです。



リサイタルポスター

具体的な現在の仕事内容は、演劇やコンサートのポスター制作のほか、カタログ名刺等のデザイン、雑誌レイアウト、新聞記事のイラストレーションなど多岐にわたります。パリにある日本企業からの受注もしばしばです。また最近では自分の得意分野である、純粋なイラストレーションの仕事に力を入れ始め、フランスのリベラシオン紙に挿絵を掲載する機会もいただきました。ほかにも、ペニンゲンの学友達とイラストレーターのアソシエーション(L'Assoc'piquante サイト:www.lassocpiquante.com)を作り、カレンダーや絵本を作る活動を行っています。

このように、文化の「視覚的表現」である、グラフィック・アートを仕事とする私にとって、文学、映画、思想、演劇など多様な文化形態を色々な視点で捉え、視野を広げることを学んだカリタスでの授業は、大変貴重な財産となっています。これからも、カリタスで得た多くの教えや出会いを糧に、自分の道を切り拓いて行きたいと思っています。

カリタス女子短期大学卒業生の活躍

ギユマール英美子(旧姓長谷川)

カリタス女子短期大学 仏語・仏語圏文化専攻 1996年度卒

早いもので、カリタスを卒業してから、約9年もの月日が経とうとしています。現在でもカリタスの先生方にお目にかかれる事や、エネルギーが豊富なカリタスの後輩達とパリ散歩をしながら、カリタスの思い出話をする事は、私の楽しみの一つであります。



通っていた田園調布雙葉中学校3年次のフランス語の授業で、シスターの話すフランス語にすっかり魅了され、高校進学時には、迷うことなくフランス語を第一外国語に選択。母の薦めで、2年生の夏にトゥールに短期留学も経験。ホームステイ先の家族との素晴らしい出会いや、充実した留学生活が、「私とフランス」物語の始まりです。

大学は、しっかりフランス語を身につけたいと、「既習者クラス」があるカリタスの仏語・仏語圏文化専攻に進学しました。クラスは少人数制、フランス語会話・文法からフランス文学・音声学と幅広いカリキュラム。期待していたフランス語漬けの毎日を送ることになりました。常に学生の傍で励ましてくださる教授や気の合う友人に出会えたカリタスでの2年間は、自分を成長させてくれた貴重で大切な時間でした。

カリタスを卒業し、青山学院大学フランス文学科に3年次編入。この時期、都内の高校のフランス語クラブで講師をしたり、フランス語受験する高校生の家庭教師をしたり、フランス語を「学ぶ」ことから「教える」ことへと興味が移っていきました。

カリタスを卒業し、青山学院大学フランス文学科に3年次編入。この時期、都内の高校のフランス語クラブで講師をしたり、フランス語受験する高校生の家庭教師をしたり、フランス語を「学ぶ」ことから「教える」ことへと興味が移っていきました。

3月に大学を卒業し、その年の9月、いよいよフランス長期留学。留学先は3度の短期留学先を選んだトゥール。語学学校で1年間フランス語に磨きをかけ、翌年はトゥール大学の現代文学部の3年次に「聴講生」という形で入学。

その後パリで「外国人のための教員免許」を取得。レポート作成や、4週間の教育実習と、多忙で辛い時間を過ごしましたが、フランス語を「学ぶ」、「教える」という楽しさを改めて教えられました。

フランス語の音が好きで、フランス人のように発音したい、フランス語を話したい、フランス語を生かした職につきたい、そう思ってから、約15年、在仏7年目に入りました。常に自分の好きな事をさせてくれて、見守ってきてくれた両親から独立し、昨年フランス人と結婚。現在はパリ17区にある私立語学学校で秘書として、フランス語教師として働いています。また個人でも、日本人駐在員の方たちや日本人の子供たちにフランス語を教えています。

学校のプロモーションのお仕事をはじめ、日本語サイト、パンフレット作成などを担当するだけでなく、日本人留学生のケアをしたり、フランス語の学習方法についてアドバイスする、なんていう事もよくあります。

中学3年生時に、初めて触れたフランス語の魅力。この言葉の美しさを、これからももっともっと多くの人たちに伝えていきたい、と日々考えています。

フランスは今。。。 Oui ou Non

Nobuko INABA

2005年4月から9月まで研究休暇で主にパリに滞在、その間の大きな出来事としては、5月末に実施された欧州連合(EU)憲法批准の可否を問う「国民投票」が挙げられる。結果は、反対54.87%賛成45.13%で、Large victoire du nonに終わった。投票直前4、5月のキャンペーンは圧倒的にNONを支持する派が、緑の党から国民戦線(フロンナショナル)まで、巧みな人海戦術で世論を操作をしていたと言える。私の住んでいた18区の商店街ではいつもNON支持派がビールをまき、議論をリード、ただし、その議論は深いものではなく、むしろ人々の不安を煽ることに終始しており、「フランスがアイデンティティを失ってもいいのか」、というものだった。最終的には、「奴隷のようにOuiと言っていいなりにしてもいいのか、」と問い詰める、この極論はルペン率いる国民戦線の遣り口ではあるが。

私たちが「Non といえない日本人だ」とすると、「Oui と言いたくないフランス人」という図式は乱暴すぎるだろうか。実際、国民投票に関しての感想を求められて私がこの論法をフランスの友人に披瀝すると、自分たちの本質をついた笑い話として受け止められ、「いやいや、Non...」とふざけながらまたしてもNonで答え、「そうだね Oui...と自分たちは確かに言わない」と笑う。

またテレビでも連日、この国民投票に関する討論会 debat が放映されており、絶えず数字で予想が流されていて、それらを mediatiser manipuler と批判する知識人も多かった。マーストリヒトの時のような将来への期待感と不安感という熱気よりも、今回は、明日への不安感とそれをいかに取り除けるかが争点となっていた。つまり OUI 派には、ユートピアを語れない現実があったということである。

さて、この国民投票という直接民主主義の功罪を人々が果たして理解しているのかという政治家もいる。肝心の欧州憲法に目を通した人は少なく、レジュメですら見ていない人が多い中で、失業問題など経済的に逼迫している人たち、あるいはその予備軍といわれた人たちは、否応なしに Non と叫んだ、と私は思う。欧州憲法への Non ではなく、この状況、置かれている状況そのものへの Non ではなかったか。

投票のその瞬間、友人たちは Non 派 Oui 派に分かれて夕食を共にしながらテレビで結果を待った。その後テレビでは、各党首や代表がデバに参加、その中に、マグレバンがおらず北アフリカ出身と思われるノワールもいなかった、女性もたった一人というありさま。もちろんフランス代表サッカー選手団とは大違いである。むしろ投票結果の分析を人種別の統計で目にするのではない。

縄倉里恵 (2年在学)

学校が企画する短期研修で、ロワール地方の中心都市であるトゥールに一ヶ月滞在し、そこで大変印象に残る経験をした。

トゥールに来て二週間目の金曜日、友人が郊外に巨大スーパーマーケットがあるという話をルームメイトから聞いてきた。家と学校の往復にも慣れ、その周辺の店は毎日の寄り道で把握した頃だったので、そこに居合わせた4人はすぐに行くことを決めた。

翌日、四人が町の中心にある市庁舎前に空のサックを持って集まった。友人が聞いてきた話では、ロワール川沿いに歩けば着くということだったので、そのとおりに進んだ。初めの一時間はおしゃべりと景色で十分に楽しめた。目的地は少しも見えてこなかったが、まだなんの心配もなかった。暫く行くと川沿いに県道が敷かれていたので、看板でもあればと、細い歩道を一列に並んで歩くことにした。だが既に一時間経つというのに、それらしき看板を見ることも、人とすれ違うこともなかった。鈍色の空の下に広がる住宅地を見下ろしながら、私たちの中によやく不安が湧き上がってきた時、私たちの目に飛び込んできたものがあった。色とりどりの花々で埋め尽くされた長方形の土地。それは公園ではなく、墓地だった。水曜の花市よりも鮮やかだが人の気配はまるで無く、その長方形だけが異様に映った。浄土のようだったと思った。

近づいてよく見るため、私たちは県道を下りた。供えられた花は殆どすべてが造花だった。長い間風雨に晒され、色があせた花束もあった。



墓地に入ったわけではない。そこに足を踏み入れる勇氣はなかったので、門の外から見ていただけなのだが、その細部までよく憶えている。そして皆黙って見ていた。

フランスに来て初めて見た市民の墓地。他の地域も、墓に造花を飾るのだろうか。それが何を意味するかは分からない。ただ、フランス人は家に花を絶やさないと。永遠に枯れることのない花束が墓の傍らに置かれるのは、それと同じ理由なのかもしれない。墓地を離れ歩き始めた4人に雪が降ってきた。通りの家の庭に、木瓜や梅の花をみた。結局私たちはスーパーを見つけられなかった。乾燥した風に髪を飛ばされながら、遠方にみえる街のシンボルである大聖堂、サン・ガティアンを目印に戻った。

9月にフランスを発つ際、友人たちが、今のフランスをどう思うかと聞いてきた。「あなた方は移民問題にオプティミスト過ぎる」が私の返答だった。10月末に端を発したアラブ系、北アフリカ系の移民2世3世によるとされる暴動のニュースを見ながら、自分がカッサンドラとなったことを知った。フランコフィルの私たちは、フランスの歴史やその結果としての現在を追いながら、「フランスの知」に期待しつつ、これからの推移を見守ろう。(稲葉延子・本学教授)

フレンチポップスの80年史のホームページ

Eric Bognar

Enseigner la prononciation du français aux étudiantes de Caritas m'a rapidement amené à utiliser des chansons françaises pendant mes cours. Voyant que les étudiantes s'intéressaient surtout aux chansons de leur époque, j'ai commencé à constituer une discothèque de chansons françaises allant des années 20 à aujourd'hui. Il y a quelques années j'ai pris en charge un séminaire sur l'histoire de la chanson française montrant l'évolution des styles musicaux (influences du jazz, du rock, etc.) et la modification des thèmes (chansons d'amour et statut de la femme). Cette année, mon séminaire se complète d'une site internet présentant une centaine de chansons françaises allant de 1925 à 2005. Ce site est fait en collaboration avec les étudiantes: je m'occupe de la conception (textes français, jaquettes de CD, et entre 20 et 30 secondes de musique enregistrée) tandis que les étudiantes ajoutent des données biographiques ou des commentaires. A l'origine, ce site était supposé être réservé aux étudiantes qui suivent ce séminaire mais comme il peut aussi vous permettre à vous, anciennes étudiantes de Caritas, de découvrir de nouveaux domaines de la chanson française, j'ai décidé d'en donner l'adresse ici : <http://www.caritas.ac.jp/z/> J'espère que vous trouverez à du plaisir explorer ce site.

ゼミでは50, 60年代のいわゆる"シャンソン"を始め、学生の好みにあわせて最新のロックやポップスを取り上げ、フレンチポップスの80年史(1925年~2005年)を扱っている。特に今年度は、授業で扱ったものを学生の協力でホームページに載せ、順次公開している。(12月現在、約80曲を紹介)CDジャケットの画像や曲の一部が視聴できるようなサイトになっており、受講生以外でも楽しめるので是非アクセスしてみてください。

アドレスは <http://www.caritas.ac.jp/z/> です。

(Eric Bognar・本学教授)

